

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第十四回 国家の“自我形成”について

私たちは自分がどんな顔の人間であるかを知っている。自分を鏡という他者に投影しているからである。投影する他者がなく孤立して生きているのであれば、自己がどんな存在であるかを確認できず、それゆえ「自意識」(セルフ・アイデンティティ)が育つこともない。近代化の起点における日本の成功、朝鮮、中国の失敗。この対照的な事実を「自己と他者」という視点から考えてみることは大変に興味深い。

日本は江戸時代の平穏な二百六十年のなかで成熟した社会と文化をつくりあげてきた。しかし、

欧米諸国と競合できる産業力や軍事を蓄えてきたのではない。四方を波高い海によって囲まれるという僥倖きやうこうのゆえに、外敵の存在を意識することなく、国内の統治に万全を期していけば平和はおのずと守られてきた。少なくとも幕末にいたるまではそうであった。「自己とは何か」という自己認識はここでは形成されなかった。

アヘン戦争後の清国が列強により蚕食さんしょくされていくさま(瓜分かぶん)に目を醒さまされ、何よりペリー来航によって屈辱的な開港を余儀なくされたことにより、日本の指導者は新しい自我形成を迫られ

た。列強の目に映る日本は文明国ではない。だから不平等条約を押し付けられたのだ。この危機から日本を脱却させるには主権国家としての内実を強化し、みずからが文明国となるより他に道はない。そういう新しい自意識が生まれた。

こういう自我が形成された国と形成されなかった国との対照をみておくとわかりやすい。朝鮮である。李朝は日本と同じように鎖国体制をとっていた。列強の開国要求を受けたことも日本と同様である。開国要求に対する日本の反応が「尊王攘夷」であり、朝鮮の反応もまた「衛正斥邪」という排外主義であった。衛正斥邪とは、「正」を朝鮮の儒学とし「邪」を夷狄として、前者を「衛」り後者を「斥」けるといふ思想である。

日本は薩英戦争、馬関戦争にもろくも敗れ、攘夷は無謀であり亡国に繋がるかと直ちに考え、逆に列強を列強たらしめている「文明」そのものを利用してしようと決し、かくして主権国家の内実を整えていった。

しかし、朝鮮はそうではなかった。衛正斥邪の思想が対外的危機のなかにあつてますます純化され、専制君主制の一段の強化へと向かった。支配層「両班」の派閥割拠の拠点である書院を廃止して特権的門閥を追放、大院君に忠誠を誓う官僚のみを周辺に配して専制政治を極度に進めた。対外的には列強の開国要求のことごとくを退け、政治と軍事の近代化への道はこれのみから閉ざしてしまつた。列強の開国要求が日本においては文明化を促し、朝鮮においては旧思想の強化を促すという対照を生み出した。ここに日朝の近代化の分岐点があり、最終的には朝鮮は日本に併合される事態となる。

アヘン戦争での敗北、太平天国の乱により王朝末期の清国は急速に衰退した。衰退を押しとどめ王朝の支配体制強化を求める運動が、曾國藩、李鴻章などの官僚政治家によつて推進された。前回も指摘した洋務運動である。「中学を体と為し西学を用と為す」のみ、高度の技術を生み出した文明そ

れ自体への関心は薄かった。旧体制護持のための運動である。西洋の衝撃に対する中国の自己認識は、中国の伝統的な政治秩序には何の変更も加えず、他国の軍事力の導入によりこれを強化しようというものであった。要するに自己認識の甘さに失敗の原因があったというべきであろう。

他者を徹底的に正確に理解し、そこから新しい自我を形成しようという意思において明治の指導者にはきわめて強いものがあつた。代表的な歴史事例が岩倉使節団の欧米派遣である。

廃藩置県を断行し、直後の明治四（一八七二）年十一月に岩倉具視を特命全權大使とし、副使に木戸孝允、大久保利通、伊藤博文などを同道、総勢百名を超える大デレゲーションであつた。列強十二カ国を実に一年九カ月にわたつて訪問し、精細な観察を繰り返した。新生明治政府がユーラシア大陸を長駆一巡するかのごとき壮途であつた。

岩倉使節団の実感を一言でいえば、文明国のもつ文明の圧倒的な力量であつたに違いない。その後

の殖産興業・富国強兵、さらに憲法と議會制度が次々と実現されていったのは、岩倉使節団の体得した知恵のゆえだったのであろう。

現代の日本は、明治維新という主権国家の形成期、いや明治の全過程と比較しても、国家としての自我形成という点において相当に劣化しているのではないかと私は恐れる。

日本はGHQ（連合国軍総司令部）による占領統治を経て、日米安全保障条約を結び、東西冷戦の時代をアメリカの軍事的庇護のもとに打ち過ごし、みずからは専守防衛、自力で自国を守るという気概を放棄してしまつた。国家の自我形成という近代日本を創造した最も重要な観念を喪失したまま第二次大戦後の七数十年を経過した。

自我の意識を欠如させたままの状態で果たしてこの「禽獸世界」を日本は生き延びることができるのか。ロシアによるウクライナ侵攻、中国による台湾周辺海域へのミサイル攻撃演習、北朝鮮の核恫

喝が、いよいよ安全保障上の差し迫った脅威となりつつある。ここで目を覚まさなければ危ういという意識が生まれてきたことは幸いである。昨年十二月に国家安全保障戦略をはじめとする「安保三文書」が閣議決定された。日本は国際関係については何ごとも外交による解決を優先させてきたのだが、安保戦略文書により大きな転換がなされた。文書ではこう語られている。

「我が国はまず我が国が望ましい安全保障環境を能動的に創出するための力強い外交を展開する。そして、自分の国は自分で守り抜ける防衛力を持つことは、そのような外交の地歩を固めるものとなる」
かくして日本は反撃能力（敵基地攻撃能力）の保有を認め、専守防衛は実質的に失効となった。先に禽獣世界と表現したが、これは福澤諭吉の言葉である（『通俗国権論』）。『時事小言』のなかで福澤はこうもいう。

「他人愚を働けば我も亦愚を以て之に^{また}応ぜざるを得ず。他人暴なれば我亦暴なり。他人権謀術数を

用れば我亦これを用ゆ。愚なり暴なり^{また}又権謀術数なり、力を尽して之を行い、復た正論を顧る^{また}違あらず」

百年以上も前の福澤の言説に沿う観念に日本もようやく目覚めたというべきか。福澤の時代にあつては列強の「西力東漸」、現在にあつては中国の海洋への暴力的な進出である。

戦後レジームの中核を長く支えてきた専守防衛を転換して敵地への反撃能力を保有することにより、日本の防衛力を目にみえるものとし、かつそのことが日米同盟の一段の強化を促すというふう^{うなが}に事態が進展して欲しい。もしそのように進展するのであれば、日本もこの新しい時代の転換期に他国の後塵を拝するという屈辱を舐めず^なにすむのではないか。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年、「成長のアジア 停滯のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西太平洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で関高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。